

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 9 月 8 日現在

機関番号：35302

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14253

研究課題名（和文）子どもの価値調整能力を育成する対話的教科授業構成の研究

研究課題名（英文）Research on interactive social studies lesson structure to foster children's ability to adjust values

研究代表者

紙田 路子 (Kamita, Michiko)

岡山理科大学・教育学部・准教授

研究者番号：00782997

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、価値調整能力を「多様な見方・考え方との出会いを通して自らの判断基準を更新、再構築できる資質」ととらえ、これを育成する授業として「納得解を追究する教科授業」を提案し、授業実践を通してその成果を明らかにした。実践の結果、子どもは地域の問題の解決において他者への「共感」と自他への「批判的思考」の2つの思考を働かせながら、納得解を構築することが明らかとなった。さらに体験・対話を通して他者に没入することで、視野を広げ、現実的な納得解を希求できた。利害関係者が双方に納得できる解を創造できたとき彼らの認識や判断は、より当該社会のあり様に適応した形で再構築されることも明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中教審「令和の日本型教育」は、子供たちに求められる資質・能力の一つとして、対話や協働を通じて新しい解や納得解を生み出す力を挙げている。本研究の第1の意義は、納得解を追究する授業構想を示し、授業に具体化したことである。第2の意義は納得解を追究する授業は、「現在進行形の、社会の状況や変化に応じた知識を身に付ける」「多様な利害関係者が納得する社会の在り方を創造する」という点で「持続可能な社会の創り手」としての資質・能力を保障する授業論であることを明らかにした点である。VUCAといわれる時代の中で、個人と社会のウェルビーイングを実現する市民を育成する社会科の在り方を提案した点に本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, value adjustment ability is considered to be "the ability to renew and reconstruct one's own standards of judgment through encounters with diverse perspectives and ideas," and we proposed a "social studies class to pursue convincing solutions" as a class to foster this ability. As a result of the practice, it became clear that children construct a convincing solution to a local problem by exercising two types of thinking: "empathy" toward others and "critical thinking" toward themselves and others. Furthermore, by immersing themselves in others through experience and dialogue, they were able to broaden their perspectives and seek realistic and convincing solutions. It also became clear that when stakeholders were able to create a solution that satisfied both parties, their perceptions and judgments were reconstructed in a way that was more suited to the state of the society in question.

研究分野：社会科教育学

キーワード：納得解の追究 持続可能な社会の担い手 対話 価値調整能力 市民的資質・能力

1. 研究開始当初の背景

現代は価値多元化社会である。「正しい」とされる判断基準は、SNSによる情報過多、人、もの、ことのグローバル化等にさらされて揺らぎ、常に主体的に吟味、更新していかざるをえない状況に置かれている。このような、社会状況を受けて教育現場においても、近年、主体的な価値判断能力の育成を目的として、合理的意思決定や価値判断を取り入れた社会科授業が多く実践されるようになった。2018年に告示された新学習指導要領では、高等学校で新たな必修科目として「公共」が設けられるなど、その動きはますます加速している。これらの社会科授業においては、価値認識については意識されるが、「異なる価値に基づく意見をどのように判断・調整し、合意を図るか」という価値判断・調整については十分に検討されてはこなかった。特に小学校では「異なる意見を調整し合意することは難しい」という暗黙の了解のもと、個々の意見を主張し合った後、自分の考えを見直し、最終的に意思決定を行う、といういわばオープンエンドで終わる授業がほとんどである。しかしながら、価値が多様化し協働を志向する現代社会においては、価値観を異にする人々の間で受け入れ可能な判断基準を常に更新、構築していく必要にせまられていく。したがって、学校教育では、意図的にそのような価値判断の調整の場を設定し、子どもの価値調整能力を育成する必要がある。

2. 研究の目的

本研究においては、既存の判断基準では解決できない事象や異なる他者との出会いを通して、自己の判断基準の自明性を疑い、新たな判断基準を構築、更新できる資質を、価値調整能力ととらえる。本研究の目的は子どもの価値調整能力を育成する社会科授業構成論を解明することである。具体的には、特に小学校社会科授業における納得解を追究する過程、価値調整過程の在り方を明らかにすることである。従来の小学校社会科においては、共同体の維持のため、本質的とされる価値を成員が共有し、一貫した行動様式を身につけることを重視してきた。しかしながら、これまで社会を支えていた伝統的な価値のみでは、急激な社会の変化に対応することは難しい。社会状況に応じて自らの行動の指針となる判断基準を、自ら構築し修正していく資質・能力が求められている。また協同化社会を目指し、対話を通して相互に受け入れ可能な判断基準を創造していく必要もある。

以上の課題を踏まえ、本研究では「どのようにすれば納得解が得られるのか」「どのように子どもの価値調整は図られるのか」について明らかにし、それを実際の授業に具体化し、実践を通してその有意性を検証する。具体的には下記の3点を目標とする。

子どもの価値判断調整過程（納得解の形成過程）の解明
に基づく授業モデルの構築
の授業モデルの具体化と価値調整能力の有意性の検証

3. 研究の方法

(1) 価値調整過程のモデル化とそれに基づく社会科授業構想の構築

価値判断、法的思考、政治的リテラシー等の理論研究を行い、子どもはどのように、社会論争問題について価値調整を図ることができるのか、そのプロセスをモデル化する。

(2) (1)の価値調整過程のモデルをもとに価値調整過程を取り入れた社会科授業構想、「納得解を追究する授業」を構築し、社会科授業設計を行う。具体的には、主に新学習指導要領において新しく設定された学習内容を教材化する。

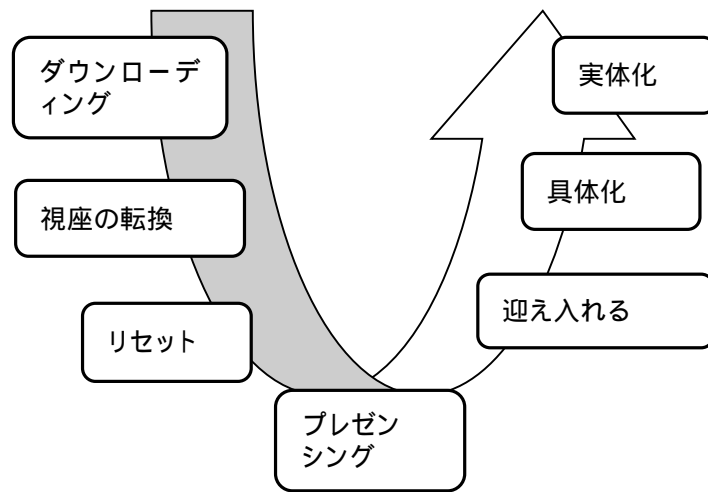
(3) 研究協力校において、授業実践を行い、「納得解を追究する授業」の検証を、子どもの価値調整能力育成の観点から行う。具体的には、授業の逐語記録、子ども及び教師へのインタビューの分析（質的分析）を行い、その効果について明らかにする。

4. 研究成果

(1) 価値調整過程のモデル化とそれに基づく社会科授業構想の構築

価値調整のモデル化の参考としたのはマサチューセッツ工科大学のC・オットー・シャーマーが提唱するU理論である。U理論は、過去の経験をベースとした変革ではなく、未来を見据えた変革を組織に起こすため、直観的・感性的なアイデアを形にするための実践方法である。そのプロセスを示したものが図1である。

ダウンローディングとは、世界を自分の習慣化した考え方のレンズを通してみているため、新しいものが思考に入ってくるのではない状態を指す。しかし、現実を新鮮な目でみるために習慣的な判断を保留したとき、視座の転換がはじまる。視座の転換とは意識を「外側」から「内側」に向けること、つまり対象に注目するのではなく、思考プロセスを生み出している源、判断基準に注目することである。「問題」は外部にあるのではなく、実は自分たちが作り出していたものであることに気付くと、古いものを手放し、よりよい秩序の形成、未来の在り方に向けての模索がはじまる。これがプレゼンシングである。出現しようとする未来を描き、迎え入れることで、新しい思考の枠組みが形成される。さらに、その新しい枠組みに基づく実践が再びアイデンティティの確立をもたらすことになる。



【図2 自己変革の過程（C・オッター・シャーマン『U理論【第二版】』から著者が作成）】

U理論をもとに、価値調整能力を育成する授業モデルを示したものが表1である。意図的に学習過程に価値調整過程を組み込むことで、子どもは多様な価値判断基準を身に付けるだけでなく、自己の既存の判断基準を相対化し、調整する方法をも習得できると考えた。

【表1 価値判断調整過程】

価値の気づき	異なる見方・考え方の比較を通して自己の思考の枠組み（価値観）に気付く
価値の保留	自己の思考の枠組み（価値観）を保留する
視座の転換	体験・対話を通して新しい視座に気付く。（自己の、状況への投げ込み）
価値のリセット	自己の思考の枠組みを手放し新たな思考の枠組みを模索する
価値の構築	よりよい未来を志向し新しい枠組みを構築する。

「価値の気づき」は、自己の判断の枠組み（価値観）に気付くことである。「保留」は、判断の基準となる自己の見方・考え方に気づき、相対化することである。「リセット」は、その判断基準を手放し、新たな思考の枠組みを構築しようとすることである。水山が、「形式的には相手に歩み寄っていたとしても、視点の内容からみると、生徒は自分の視点をそう簡単には手放そうとしていない」と述べているように、子どもの思考の枠組みは容易には変わらない。しかし、自分の思考の枠組みをいったん手放すことなしには、新たな思考の枠組みはなされない。社会論争問題、および価値判断学習において、合意形成、価値調整が困難であるのは、子どもが自己の価値判断基準を容易に手放さないためである。このため、子どもは違う考えに触れたとしても、ダウンローディングの状態に回帰し、新たな知見や情報も既存の思考の枠組みの文脈の中で再解釈し、組み込んでしまう。思考の枠組みを手放す方策として、シャーマンは「観察すること」や「対話すること」ではなく「問題の当事者になること」「当事者であること」、つまり、その存在に丸ごと入り込むことによって、その世界の完全な経験に生きることをあげている。現場固有の社会的な過程をできるだけ排除し、「普遍的な」ものだけを取り出した知識は、子どもの既存の思考の枠組みを揺さぶらない。納得解の追求のためには、自らの思考の枠組みを手放すことができるような現場条件に基づく知識、すなわち「現場知」が必要である。その上で、よりよい未来を志向する新たな思考の枠組み、すなわち納得解が再構築されるのである。

（2）の授業モデルの具体化と価値調整能力の有意性の検証

2023年度「中・西播磨地区小学校社会科教育研究大会」のため、2022年から、赤穂市立城西小学校と協力し、「納得解を追求する社会科授業」の実践研究に取り組んだ。本研究では特に第5学年「自動車工業のさかんな地域」、第3学年「地域の安全を守る活動」の納得解を追究する場面の授業記録、及び、子ども、教員へのインタビューを分析し、「子どもの価値調整能力の育成」の観点から評価した。さらには、「納得解」を求めない意思決定学習と比較することでその有効性について検討した。納得解を追究する授業の分析を通して明らかになったのは以下の点である。

第1は、納得解を追究するための対話は「共感」と「批判的思考」の2つの思考を可能にできる点である。図2は社会科授業における「共感」と「批判」の関係を示したものである。

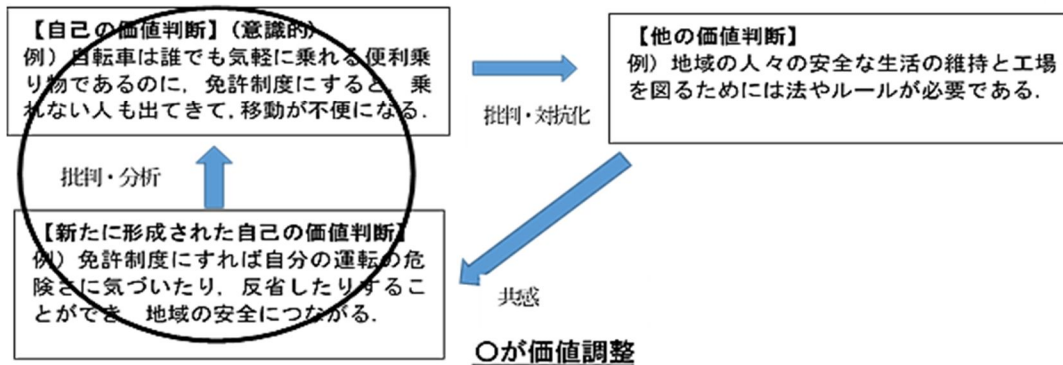
○「社会化」を保障する社会科授業



○「主体化」を保障する社会科授業



○「納得解」を追究する社会科授業



「工夫・努力」を追求する社会科授業は「共感」を、討論学習、意思決定学習は「批判的思考」を育成するものとしてとらえられることが一般的であった。前者はピースタの主張する「社会化」を、後者は「主体化」を保障するものである。その反面、前者は自主的自立的な価値判断能力が形成されないこと、後者は自己の見方・考え方が強化され、他者との調整能力が養われないこと、また無責任に他者を批判することにつながりかねないことが指摘できる。

納得解を追究する授業においては、まず自己と異なる他者の意見を知ることによって自己の価値判断基準を相対化する。そして他者に受け入れ可能な「納得解」をつくるために、他者が「なぜそのような判断に至ったのか」共感的に理解する。それにより新たな価値判断基準を模索する。かつての自己の判断基準を批判的に分析することによって、判断基準の調整が行われる。例えば「自転車を免許制にすべきか」の話し合いにおいて、「時間・お金の負担軽減」を基準として判断をしていた児童は、他者の「ルールは遵守すべき」という考えに共感し、「命あってこそこの自由」と判断を調整した。このように、納得解を追究する授業においては、批判（他者） 共感 批判（自己） 調整という過程を通して、最終的な納得解を構築することができる。

第2は、前時までの学習を活かさざるを得ない対話である点である。二律背反状況にある価値を両立させるには、具体的な状況を想起する必要がある。例えば、「自転車を免許制度にすべきか否か」の話し合いにおいて、「自転車の利便性・負担の軽減」と「安全・ルールの重視」という価値を両立するには、「地域の交通安全の現状はどうか」「どのような人がいつ自転車を使っているのか」「自転車事故はなぜ起こるのか」「なぜ自転車事故が減らないのか」という知識、さらにはその前提として「どのような人が地域の安全のために働いているのか」「どんな取り組みをしているのか」等の地域の交通安全についての知識を知っておく必要がある。これらの知識が獲得できていなければ、納得解をつくることは難しい。すなわち、納得解を追究する授業は子どもの価値調整能力だけでなく、知識の獲得も保障する授業といえる。

第3は、子どもが社会科授業の意義を感じることができる点である。「自転車を免許制度にすべきか否か」の納得解の追究後のインタビューにおいて、児童は「みんながそんなに苦労してるんだったらその苦労を減らさなきゃならないとか」と社会科を学ぶ意義について述べている。つまり彼らは、「社会化」や社会への「批判」にとどまらず、様々な立場に立って価値調整をすることで社会をよくしていくこと、あるいは未来をつくることにつながる授業として一定の手ごたえを感じていることが推察できる。

(3) 本研究の成果と課題

第1は、シャーマーのU理論をもとに、価値調整過程を示し、「納得解を追究する授業」に具体化することでその成果を明らかにした点である。授業記録、児童のインタビュー、教員のインタビューの質的分析の結果、3つの意義（納得解を追究するための対話を通して「共感」と

「批判的思考」の2つの思考を可能にしている（前時までの学習を活かさざるを得ない対話である（子どもが社会科授業の意義を感じることができる）が認められた。第2は、二者択一の問題に対するオープンエンドの話し合い活動においては、子どもの自主的自立的な価値判断基準を育成する効果があることを明らかにした点である。納得解を追究する授業が成立するためには、子どもの共感的理解と自主的自立的な判断に基づく批判的思考が必要不可欠である。すなわち「社会化」を保障する社会科授業、「主体化」を保証する授業、納得解を追究する授業を効果的に組み合わせることで、子どもの価値調整能力は育成できるものとする。

この研究成果をもとに、小学校段階の社会科カリキュラムをあり方について検討していくことが今後の課題である。

引用文献

C・オットー・シャーマー/中土井僚・由佐美加子訳，U理論【第二版】過去や偏見にとらわれず，本当に必要な「変化」を生み出す技術，英治出版，2017，pp. 101-124.

水山光春，合意形成をめざす中学校社会科授業：トールミンモデルの「留保条件」を活用して，全国社会科教育学会『社会科研究』第47号，1997，pp.51-60．

ガート・ビースタ/上野正道・藤井佳世・中村（新井）清二訳，民主主義を学習する 教育・生涯学習・シティズンシップ，勁草書房，2014，pp. 184-214.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 紙田路子	4. 巻 3
2. 論文標題 子どもの価値調整能力を育成する小学校社会科授業構成：第3学年「地域の安全を守る働き：自転車を免許制度にすべきか否か」納得解の追究過程の分析を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会系教科教育学論叢	6. 最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 紙田路子	4. 巻 149
2. 論文標題 価値判断基準の再構築における地域学習の意義 「批判的に肯定する」地域学習の授業構成 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会科教育研究	6. 最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 紙田路子	4. 巻 59
2. 論文標題 納得解の追究が保障する知識の再構築：探究活動Iにおける地図作成を通して大学生が獲得したもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山理科大学紀要. B, 人文・社会科学	6. 最初と最後の頁 31-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高橋 周平 紙田 路子	4. 巻 58
2. 論文標題 国際バカロレア教育が学校教育改革に与える示唆：単元“Sharing the planet（この地球を共有するということ）”の実践を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岡山理科大学紀要. B, 人文・社会科学 58	6. 最初と最後の頁 63-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紙田 路子	4. 巻 第3号
2. 論文標題 子どもの価値調整能力を育成する小学校社会科授業構成 「納得解」を追究する社会科授業の分析を通して -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会科教育学論叢	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紙田 路子	4. 巻 149
2. 論文標題 価値判断基準の再構築における地域学習の意義 「批判的に肯定する」地域学習の授業構成 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会科教育研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紙田 路子	4. 巻 33
2. 論文標題 市民的資質・能力を育成する防災教育の在り方：小学校第6学年社会科単元「水害から考える地域の防災」の設計を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会系教科教育学研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紙田 路子	4. 巻 57
2. 論文標題 小学校生活科における歴史学習の可能性：歴史的实践に基づく小学校低学年の歴史学習	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岡山理科大学紀要. B, 人文・社会科学	6. 最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紙田 路子	4. 巻 56
2. 論文標題 民主主義の担い手を育てる教師の教育：「初等社会科内容論」の実践を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山理科大学紀要. B, 人文・社会科学	6. 最初と最後の頁 39 - 54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紙田 路子	4. 巻 57(8)
2. 論文標題 全国社会科教育学会会員リレー連載 社会科における深い学びの実現とは(第5回)「深い学び」とは自己を再更新する連続的な学び	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会科教育	6. 最初と最後の頁 120-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紙田路子	4. 巻 27
2. 論文標題 公共的意思決定のための小学校社会科授業構成ー「判断基準の保留」に着目した第6学年単元「ハンセン病から考える」の実践ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 公民教育研究	6. 最初と最後の頁 p p . 15 - 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紙田路子	4. 巻 55
2. 論文標題 主体的な価値判断能力の育成を目指す領土問題学習の授業設計：第6学年小単元「竹島問題を考える」の開発を事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岡山理科大学紀要. B, 人文・社会科学	6. 最初と最後の頁 p p . 32 - 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 紙田路子	4. 巻 56
2. 論文標題 成功のためにできる教師のナビゲート術 討論授業のゴール(目的)を見据えたナビゲートを (特集 対立と合意を考える! 思考を深める「討論教材」25選) -- (思考を深める「討論授業」)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会科教育	6. 最初と最後の頁 pp. 20 - 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 紙田 路子
2. 発表標題 子どもの価値調整能力を育成する小学校社会科学習の授業構成 「納得解」を追究する社会科授業の分析を通して -
3. 学会等名 社会系教科教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 紙田 路子
2. 発表標題 価値調整能力を育成する社会科授業の検討 - 水害から考える地域の防災」の授業設計を通して
3. 学会等名 第9回全国社会科教育学会・韓国社会科教育学会研究交流
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 紙田路子 角田正和 神山大樹
2. 発表標題 社会科が担う防災・減災教育の在り方 小学校第5学年単元「水害から考える減災」の設計を通して
3. 学会等名 社会系教科教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------